

第5章 書き方の形式

その1 本文の書き方

1. p149 4. 挿入文の書き方

挿入文の前後の行あけについてお尋ねします。原本に1行あけがあれば、迷わず次ページ1行目でも行あけを残していますが、原本には挿入文の前後に行あけがなく、点訳では、挿入文の終わりを区別するために1行あけたときに、その1行あけが次ページの1行目に来た場合は、もともと原本にはない行あけなので、行あけを省略してもいいのでしょうか。それとも、行あけは1行目でも残すほうがよいのでしょうか。

【A】

挿入文の終わりを区別するために1行あけたのですから、次ページの1行目に来た場合も、行あけをしないと区別がつかないのではないのでしょうか。次ページの1行目にきても、行あけします。

2. p149 4. 挿入文の書き方 【処理】

挿入文全体を二マス下げて書くと、前後の本文と区別がしにくい場合や点訳上不都合が生じる場合は、原文と異なっても前や後ろを行あけするなどの工夫をして書くことができる、とありますが、具体的にどのような場合に不都合が生じるのでしょうか？

【A】

例1では、原文通りに挿入文を二マス下げて書いていますが、挿入段落の最後の行と、本文に戻った最初の行（「イイカゲンニ」以下）がどちらも3マス目で書き出し位置が揃うために、挿入文の終わりと本文の始まりの区別が分かりにくくなります。そのため、原文で挿入文前後に行あけはありませんが、点訳では挿入文の後を行あけしています。

このほか、挿入文が長く、点字で何ページにも及ぶ場合は、ページ数がかさみまですし、そのページ全体が下がっていると下げたことが分かりにくくなり、あまり効果がないこともありますので、このような場合は原文と異なっても挿入文を下げずに、前後の行あけだけにする場合もあります。

3. p152 5. 簡条書き

簡条書きのあと普通の本文に戻る場合に、簡条書きが終わったことが分かりにくい場合には、原本にはない1行あけを入れることは可能でしょうか？

【A】

墨字原文で、箇条書きの冒頭に黒丸をつけたり、書体や文字の大きさを変えたりするなど、何か視覚的な工夫がされている場合は、点字では1行あけに代えて書いてよいと思いますが、墨字原文にも何も処理がなされていない場合は、読みすすめば理解できると考え、墨字原文の通りにするのが一般的な方法ではないかと思います。ただ、点字であるためにさらに分かりにくいと思われる場合は、点訳の工夫の範囲で1行あけることもやむを得ないかもしれません。

4. p152 6. ニマスあけ

作者名と書名、書名と出版社、アーティスト名とLP名などの間は、「」や『』があってもニマスあけがよいでしょうか？

(例) 石川淳『黄金伝説』

【A】

作者名と書名、書名と出版社など、異なる要素の羅列の場合は、ニマスあけが原則ですが、カギで囲まれている場合は一マスあけでよいとしています。しかし、ニマスあけたから間違いというわけではありません。

その2 見出しの書き方

1. p156 2. 見出しの段階を示す文字や数字 「コラム30」

見出しに数字が付いている場合は、行頭のあけ幅が同じでも、原則として大きい見出しから順に数1 ■■ 数1. ■ (数1) ■ とします。とあります。原本の見出しが、「1.」「1」「(1)」のような順で記載されている場合はどうなるでしょうか。①見出しの工夫が必要な場合以外は、原本通りがよい。②常に同じ順で使う方が段階を把握しやすく誤読防止になるので例の順に置き換える。または置き換えてよい。③先に示された例の順に変更する場合、点訳書凡例で断る必要はない。

【A】

特に原文と同じにする必要がなければ、大きい方から「数1 ■■」「数1. ■」「(1) ■」にするのが分かりやすいと思います。

会議などで墨字と点字を読み合わせる場合、教科書のサブテキストで教科書の見出しの段階に揃える必要がある場合などは、原文通りの書き方にする必要がありますが、それ以外は、p155の例のような順序にするのが読みやすいと思います。

なお、原文通りにしたから間違いというわけではありません。

いずれにしても点訳書凡例で断る必要はありません。

2. p156 2. 見出しの段階を示す文字や数字 「コラム30」

見出しの段階が多いときの、見出しの数字を囲む記号の書き方は、

数字の後ろを二マスあけ → 数字の後ろにピリオドを付け1マスあけ → 数字を第1カッコで囲む は、一般的書き方かと思います。

その下の段階の数字を囲む記号として、以前盲学校の教科書には、第1カギが使われていたと聞きましたが、どう書けばよいか迷います。

【A】

「コラム30」にありますように、見出しの段階が多くて、種々の工夫をしても、より小さい段階を示す数字が必要な場合があります。

その場合に用いる記号について、「てびき4版」編集過程の「原案」では具体的に提案しました。ただ、編集委員会で細部にわたって十分な合意を得るまでには至らなかったもので、最終的には掲載を見合わせました。

原案で例示した囲みの記号は、数字を②③⑥ ③⑤⑥の点（リロ下がり）で囲む、数字を第2カッコ、二重カッコ、第1カギで囲むの4つの方法です。ただ、第1カギで囲む方法は、カギの中に引用されるときには用いられない、間に波線を用いることができない、第2カッコ、二重カッコで囲む方法はマス数が多くなるなどの不都合がありますので、「てびき4版」の原案の点字版では、リロ下がりを用いました。

この方法は、本文中に書き表す必要があつて後ろに助詞、助動詞が続く場合は、助詞、助動詞との間を一マスあけます。またリロ下がりで囲むことができるのは数字だけになります。

なお、「コラム30」の最後にあるように、どの記号を用いるにしても見出しの数字を囲む記号として用いるのは本来の用法ではありませんので、必要に応じて点訳書凡例で断るようにしましょう。

3. p157 3. 副見出し

原文で副見出しが前後を棒線で囲まれている場合、棒線でつなぐだけで良いか、原文通り囲むべきか。また、本文の中に同様にして書かれている場合も、同じ扱いになるのでしょうか

【A】

墨字の本で、副見出しや副書名などを棒線や波線などで囲むのは、視覚的な飾りであつて、これは厳密に言えば記号類の棒線とは言えないと思います。墨字でも本や出版社によって様々ですので、点訳では、標題紙以外は②⑤②⑤の点でつなぐことをお勧めしています。

4. p157 3. 副見出し

見出しと副見出しを棒線でつなぐときに、見出しの最後に句点がある場合には、

句点の後ろは二マスあけて棒線を書きますか？

【A】

p 204(4) 書名と副書名の場合と同じく、記号間の優先順位に従い、二マスあけて棒線を書きます。

5. p159 6. 出典表示

例 2 は出典を 5 マス目から書いて 1 行に収めていますが、この場合は 2 行に分けて書かない方がよいのでしょうか？

【A】

書き出し位置を下げて 2 行に分けて書いてかまいません。この場合は 5 マス目から書くところとちょうど 1 行に収まるため、このような処理もできることを例示したものです。コラム 31 に説明しましたように、出典表示は行頭 10 マス以上あけて書く方法が一般的です。

6. p160 6. 出典表示 「コラム 31」

このコラムの内容について、どの書き方がお勧めなのか分かりません。とくに③について教えてください。

【A】

出典表示の書き方はいろいろな方法がありますが、コラムではまず前半（行あけ前まで）に、最も基本的なスタイルについて説明しています。原文で行末に寄せて書いてある場合、点字ではどの程度右に寄せたらよいかの基準として、① 10 マス以上あけることを標準として、その理由を上段落に説明しました。② に 2 行目以下の書き出し位置は 1 タイトルの中では書き方を揃えた方がよいことを説明していますが、出典表示の長さが様々な場合、1 行目の書き出し位置はその都度バランスの良い位置に決めてかまいません。

③ 出典表示が 2 行以上になる場合に、その途中でページが変わることはやむを得ないことで、プリントアウトした点字を読む人にとって多少読みにくいかもしれませんが、出典表示だけを次のページに送ったりしないのが一般的です。むしろ前の文のあと行あけがあって次ページから書き出し位置を下げた文が始まると、新たな大見出しと紛らわしくなる可能性があります。

コラムの後半ですが、出典表示の多い本や、出典の記載が長いようだと、その都度行数がかさみますので、「ただし、」以降に説明する方法も取ることができます。前ページの例 2 は、5 マス目書き出しにすることによってちょうど 1 行に収まることからこの書き方もできることを示したものです。もし 1 行に収まらないのであれば、5 マス目から書くのは一般的ではありません。

ただ、コラムにありますように、長い出典が多いなどの理由で、書き出し位置を

5マス目や7マス目にすることも許容されます。例2の場合、出典の記載はカッコに囲まれ、ふたえカギで囲まれた書名から始まりますので、出典であることがすぐにわかることから、見出しと同様の書き出し位置でも大きな支障はありません。冒頭に「出典」などと書いてあればさらに明白ですので、3マス目から書くこともできます。

このように、原本の出典の書き方や、出典記載の頻度、長さなどを考え併せて、どのスタイルで処理するかを決めてください。

「てびき」ではこのほか、詩歌・戯曲の点訳例、表の点訳例にも出典表示が含まれていますので、参考にしていただけるとと思います。

その3 詩歌・戯曲などの書き方

1. p166 2. 短歌・俳句・川柳など

文中に短歌や俳句を引用する場合、原文に行あけがなくても本文との間を行あけしたほうがよいのでしょうか？ 書き出し位置は下げた方がよいのでしょうか？

【A】

句集や歌集では3マス目から書きますが、文中に引用されている場合は5マス目から書くことも多く、この場合も前後を行あけしたほうがよいと思います。3マス目から書き出す場合は、必ず前後の行あけが必要です。活字書では行あけがなくても短歌や俳句が挿入されていることが一見して分かりやすいのですが、点字では分かりにくいので、このような配慮が必要です。

2. p172 4. 手紙文や公用文の書き方

遺稿集などに出てくる手紙文についてです。

- ①手紙本文の最後に、行替えし行末に寄せて書かれている「敬具」「敬白」などの結びの語
 - ②手紙本文の後に、行頭から少し下げて書かれている日付
 - ③更に行替えし、行末に寄せられた差出人の名前
 - ④日付と同じ行に書かれた差出人の名前が1行で収まらない場合
 - ⑤最終行、日付よりさらに書き出し位置を下げて書かれている宛名
- これらの書き出し位置は、それぞれ何マス目からになりますか。

【A】

点訳ですので、原則として原文と同じ位置に点訳するようにします。

- ① 「敬具」「敬白」「草々」などは原文通りに行末近くに書きます。

行末にぴったり揃えて書かなければならないというものではありませんので、前

の行との関係で、23マス目とか、25マス目程度で構いません。

② 日付は、5マス目あるいは7マス目から書くとよいと思います。

③ 行替えして行末近くに書きます。

④ 日付と同じ行に差出人を書く場合は、日付のあと二マスあけて書きます。

この場合、日付を5マス目から書けば1行に収まるのか、7マス目から書けば収まるかを検討します。そして日付と差出人名が1行に収まらない場合は、日付の下の行の行末近くに差出人名を書きます。その場合、上の行より少なくとも二マスは下がった位置から書き始め、1行に収まらない場合は、続きを差出人名の1行目から二マス下げて書きます。

⑤ 宛名は、行のはじめの方に書きます。一般には、相手の名前が一番上に書かれると思いますので、3マス目から書くのがよいと思います。日付より下がって書いてあっても7マス目より下に書くことは避けた方がよいのではないのでしょうか。

原文通りの位置に書く場合でも日付を5マス目から書いたら、同じ5マス目か、下がっても7マス目からは書き始めたいと思います。

この辺は、規則性の強いところではありませんので、上記を目安にいただければと思います。

その4 表や図の書き方

1. p187 3. 区切り線・枠線 (1) 【備考2】

「奥付の原本奥付と点訳書奥付の区切りには、行頭・行末を二マスあけた②の点の線か、行頭・行末を8マスあけた実線の区切り線を用いることを原則とする。」とあります。行頭・行末を10マスあけた実線が外された理由を教えてください。また、行頭・行末を10マスあけた実線、行頭・行末を10マスあけた②の点これらは許容されますか？

【A】

今回の改訂で、区切り線として用いるには、行頭・行末8マスあけか10マスあけの実線となりましたので、3版まで用いていた例を変更することにしました。その際、原本奥付と点訳書奥付の間は、どちらかと言えば長い方がよいという判断で行頭・行末8マスあけの実線か、行頭・行末二マスあけの点線にしました。

ここは、5章の奥付（その6）に関するところで、規則性の弱いところですから行頭・行末の10マスあけの実線や点線を用いても間違いと言うことはありません。

ただ、今後長年用いるものですから、何年か経ったときに考え直したり、検討し直すよりも、長年使用しても疑問や迷いの生じないように変更するチャンスであると考えられたらいかがでしょうか？

2. p189 3. 区切り線・枠線 「コラム34」

写真のキャプションに、人物の位置を表わす（右）・（中央）などのカッコ書きが出てきますが、これは省くことができますか。

【A】

とくに規則はありませんが、特別な理由がない限り、省略して差し支えないと思います。

その5 ルビやマークなどの書き方

1. p191 1. ルビの付いた言葉の書き方

翻訳物で、漢字に外国語のルビがついているのですが、次に同じ言葉が出た時は、ルビがついていません。p192【処理】に「文脈から判断してルビを書くか元の漢字の読みを書く」とありますが、分かりやすい方でよいということですか？

【A】

漢字に外国語のルビが付いている場合、断定はできませんが、多くの場合、著者がその本では、その漢字をルビのように読んで欲しいという思いが込められていると思います。ですから、一般的には、ルビを書いた方がよいと思います。ただ、ルビが付いているところだけ、その読みで読ませたい場合もあります（「ハンドブック第5章編」p52 コラム「ルビもいろいろ」参照）ので、「分かりやすい方」ではなく、「文脈」によって判断してください。

2. p191 1. ルビの付いた言葉の書き方

「i-Phone Xs」（アイフォン テンエスと読みます）にルビがついていない場合は、Xをローマ数字で点訳すれば、読む方が「テン」と思って読んでくれると思うのですが、カッコ書きで読み方が必要でしょうか？

また、「docomo X i」と書いてあり、「ドコモ クロッシー」とルビがない時は、カッコ書きで読み方が必要でしょうか。こちらは聞きなじみがないので、必要な気がします。

【A】

原文にルビがない場合、原文の表記の通りに書くか、それにカッコで読みを付けるか、読みだけを書くか等、迷いますが、それは、原本のジャンルや表現、文脈などによって判断するしかないと思います。カッコで読みを付けることは親切ですが、墨字の読者もどう読むのかは分からない場合もありますので、該当する語句を点訳することによって分かりにくくなっているのかどうかということも判断のよりどこ

ろとなると思います。

原文の通りに点訳した場合、XSは大文字のようですので、引i=大Phone
■大X外大S引(外は、英語点字の文字 ⑤⑥の点です)、「docomo Xi」
は、外docomo■外大Xiとなります。

3. p191 1. ルビの付いた言葉の書き方 (2) 【備考】

「ルビの言葉が一般的であればルビだけを書く」とあるが、一般的かどうかはどのように判断すればよいでしょうか。判断の目安があれば教えてください。

【A】

「生命」「身体」などは、「せいめい」「しんたい」と読むか、「いのち」「からだ」と読むか迷います。その判断に助けを与えるようなルビは、ルビだけを書いてよいと思います。

「理由」に「わけ」、「夫婦」に「めおと・みようと」、「乳母」に「めのと」とルビが振ってある場合なども、「ワケ(リユウ)」「メオト(フーフ)」「メノト(ウバ)」とは書かない方がよいと思います。

「香草」「竪琴」「旅券」「使用者」の場合は、「ハーブ」「ハーブ」「パスポート」「ユーザー」に漢字を当てはめたような使い方ですので、ルビだけを書いたほうが自然な言葉です。

アポイント(ヤクソク)、リタイア(タイショク)、リユース(サイリヨウ)、リサイクル(サイシゲンカ)などは、ルビの言葉より漢字の方が意味が分かりやすいので、外来語で読ませるに当たって、漢字を示すことで文脈上の意味合いを伝える意図が込められていると考えられますが、ルビだけを書く用例としている「ハーブ」「ハーブ」「パスポート」などは漢字よりもルビの言葉の方が一般的で分かりやすくカッコ書きを入れることに、読み取り上メリットがないともいえるのでしょうか。

あまりメリットがなくても原文の書き方を伝えなければならないという考えもあるかもしれませんが、墨字はルビと漢字を同時に読み取れるのに対して、点字ではカッコ内も逐一読まなければならないので、文脈を中断するデメリットもあります。そのあたりも考慮して判断することが必要となります。

4. p193 2. マーク類の書き方

ツーバイフォー建築を「2×4建築」と書いてある時、読みの通り「ツーバイフォー」と点訳してよいでしょうか。

【A】

「2×4建築」の場合は、「ツーバイフォー」と読みだけを書くのがよいと思います。「×」を「バイ」と読み、かけ算をそのまま表しているとは言えませんので、「2×4」を、「2■カケル■4」と点訳したり、算数記号のかけ算で点訳するのは、適

当ではないと思います。

クルマの4輪駆動を表す「4×4」もかけ算ではありませんので、「フォーバイフォー」と書くのがよいと思います。

5. p194 2. マーク類の書き方 (4)【処理1】

著作権を意味する©マークや登録商標を示す®マークは、「普通は省略する」とあります。ここで言う「普通」の範囲が分かりにくいので、省略できる場合の一例を示していただけないでしょうか。

また、特に示す必要がある場合の処理の中に、第1カッコを使う方法がありますが、その場合カッコは前に続けますか、それともマスあけしますか。

【A】

この記号は、「省略することを原則とする」とまでは言えませんが、一般にほとんど省略するという意味で書いています。この後ろに「特に示す必要がある場合」とあるように、記号を特に示す必要がある場合だけ書きます。

例えば、「登録商標は、®の記号で示されます」と記号の形を説明する場合や、著作権や登録商標に関する本などで、そのマークが付いている場合と付いていない場合を区別しなければならないような特殊な本の場合は、省略しない方がいいのかもしれないかもしれません。専門書であっても、薬の名前が列挙してあってそれにすべて®が付いている場合なども、省略しても差し支えないと思われます。

CやRをカッコで囲んだ場合は、(株)などと同様に、その前を一マスあけます。

6. p195 3. 数の略記

下がり数字は、まえがきなどのページづけや、索引の巻数などを表す時に使っていますが、アラビア数字と漢数字が混在しているときに、漢数字だということを表すのに使うことはできるのでしょうか？BESの画面上は下がり数字が漢数字で表示されるけれど、本文中で、漢数字を表すために使うことはできないと思うのですが。

【A】

点字編集画面で下がり数字が漢数字で表されるために、本文中に漢数字が出てきたときに下がり数字を使ってしまう方がいますが、それは誤りです。一般に、漢数字で書かれていても、数量や順序を表す場合は、数符を用いて数字で書きます。

法律条文などでは、項はアラビア数字で、それより小さい号は漢数字で書かれています。そのような場合は、漢数字の方をカッコに入れた数字にする等して区別をします。このように、アラビア数字と漢数字が混在していて区別の必要がある場合は、レベルの大小によって、なにもつけない数字と、ピリオド付き数字、カッコ囲みの数字にするなど、レベルの違いを正しく読み取れるように工夫が必要になっ

てきます。

上記のような場合以外で、特別に漢数字であることに意味があり、それを区別する必要がある場合は、普通の数字を書いた後で、点訳挿入符で「漢数字」などを入れます。または、本全体に区別する必要がある場合は、点訳書凡例で、「この本では、漢数字を下がり数字で表す」のように断る必要があります。

7. p196 4. 原文の誤字・誤植の扱い

地元関係の本を点訳していて、明らかな誤字が多数あります。直してよいでしょうか。

【A】

原本の誤字については「てびき」p196の4. ならびに「コラム36」に準じて処理をしてください。明らかに誤りと思っても、念のため、原本ページと原本表記、それに正しいと思われる表記を書いて一覧にして、点字図書館から出版社に確認をするのがよいと思います。ほとんどは間違いであっても、中にはこちらの勘違いということもあるかもしれません。

地名などの明らかな誤字は、修正して、正しい情報を伝えるのがよいと思いますが、確認を怠らないようにし、慎重に取り扱う必要があります。

8. p196 4. 原文の誤字・誤植の扱い

時代小説にはルビが振ってある語句が多くあります。広辞苑など現在使っている国語辞典で調べると、辞書には載っていない読みもあります。例えば以下のような例です。このような場合は、原本のルビ通りに点訳していいのでしょうか。

腰高障子 ルビは（こしだかじょうじ）広辞苑は（こしだか しょうじ）

老中 ルビは（ろうちゅう）広辞苑（ろうじゅう）

九段坂下 ルビは（くだんさかした）広辞苑（くだんざかした）

【A】

現在発行されている書籍類、特に、読み物のルビは、作者自身が拘ってつけたものはほとんどなく、出版所の担当者が読者の便を図って、付けたものです。

固有名詞を含め、ルビの誤りも多くみられます。点訳に当たっては、ルビが付いていても、そのまま鵜呑みせずに、辞書などで調査することが望ましいと思います。そうはいつても、調査しても不明な場合や、調査できないような市井の人名の読みなどはルビに頼らざるを得ないこともあります。

例に挙げられた「腰高障子」「老中」「九段坂下」は、広辞苑だけでなく、他の辞典で調べても「こしだかしょうじ」「ろうじゅう」「くだんざかした」の読みが正しいと言えますので、調査の通りに点訳してよいと思います。

その6 本文以外の割り付け

1. p198 3. 標題紙

表題紙の著者名の書き方についてお尋ねします。奥付に「著者 ○○」とあれば表題紙では「○○著」と書いていますが、点訳中の本の奥付には「著者 ○○」、「聞き手 ○○」とあります。この「聞き手」は表題紙ではどのように書けばよろしいでしょうか？

【A】

特に規則は設けていませんが、原本の奥付の語を使用して「キキテ」と書いてよいと思います。標題紙では「○○チョ」「○○キキテ」となります。そのほか、「述」「インタビュー」や「ノベライズ」などがありますが、これらも、原本の語をそのまま用いて書きます。

2. p200 4. 目次

大見出し・中見出しのある本で、中見出しには、目次に記載があるものとないものが混在していますが、原本通り点訳して問題はないでしょうか？

【A】

点訳書の目次は、その点訳書の内容が分かりやすいように、検索できるように作成するものです。原本の目次とは異なるものと考えてください。ですから、原本の目次にない項目でも点訳書の目次に入れてかまいません。原本の目次になくても、点訳書では中見出しをすべて入れることができます。

3. p200 4. 目次

本文中に見出しが一つもなく、原本に目次がない場合、点訳書凡例・はじめに・あとがき・著者紹介などは、目次に掲載したほうがよいのでしょうか。

【A】

標題紙・目次・奥付は点訳書独自のものですので、ご質問のような場合の処理は、各施設・団体で判断されていいと思いますが、ご参考までに「てびき」から考えられる一般的な処理を記してみます。

原本に見出しがなく、目次もついていない場合は、本文の前後に、献辞や登場人物、あとがきや著者紹介などがあっても、点訳書でも目次をつけないのが一般的ではないかと思います。今回ご質問の原本の場合も、目次をつけなくても差し支えない範囲ではないでしょうか。

ただ巻末に、あとがき・解説・作家の年譜などが掲載され、後ろの資料も参考にした方が読解に便利などの理由で、読者にそのページを知らせた方がよいと考えら

れる場合には、最終巻にだけ目次を入れるという方法も考えられます。その場合、点訳書独自の留意事項ですし、最終巻に目次がついていることを、初めに読者に知らせた方が親切ですので、第1巻の最初に「点訳書凡例」をつけるのがよいのではないのでしょうか。点訳書凡例で、「最終巻には、～などがついていますので最終巻にだけ目次をつけました。」と断れば、読者に分かりやすいと思います。または、あとがきなどの項目とページを点訳書凡例に入れてしまって、目次はつけないという方法もあります。

4. p200 4. 目次 (4)

目次の書き方についてお尋ねします。「てびき4版」のp200 「4. 目次」(4)に「見出しの語句は、29マス目以降にかからないようにする。」とあります。3版の「指導者ハンドブック 5章編」では、「施設によって27マスか、28マスで改行する書き方がある」と書かれていました。(p67)

「てびき3版」での記述は「行末は数字にかからないようにする」です。

「てびき」の考え方としては、「29マス目以降にかかなければ、施設・団体で決めてよい」と解釈してよいのでしょうか。当館では「行末は27マス目まで」と決めていたのですが、「29マス目以降～」と明記されましたので変更するべきか否か少し悩んでいます。

【A】

ここは、「4版」で規則を変えたわけではなく、より分かりやすいように具体的に書き改めたところです。

目次の数字は、3ケタの数字を書くことを想定して29マス目に数符が来るようにし、そこに見出しの語句がかからないようにします。27マス目まで文字を入れている施設・団体と、28マス目まで入れているところがあると思いますが、どちらでもよいので、これまでの方法をわざわざ変更されなくてよいと思います。

28マス目まで文字を入れれば、1行少なくて済むということも稀にありますが、一方、28マス目を必ず空マスにすることで、数字の位置が分かりやすいという利点もあると思います。

5. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

目次から本文に入るまでに設ける「表紙・カバー等の記載事項」・「謝辞」・「引用文や言葉」・「写真」・「参考事項」・「序文、まえがき」等、ページ数に下がり数字を用いる項目については、目次にも各項目名と共にページ数を入れた方がよいのでしょうか？

また、標題紙、原本奥付以外に下がり数字のページ付けを入れなくてもよい項目がありますか？

【A】

目次は、その図書の内容を検索するために記すものですので、できるだけ探しやすい、その巻に含まれている内容がわかるようにするのがよいと思います。そのような目次の目的からすると、下がり数字のページ数がついているところでも目次に入れた方がよいと言えるでしょう。

標題紙、原本奥付以外に下がり数字を入れなくてもよい項目があるかどうかということですが、目次から本文に入るまでに設ける「表紙・カバー等の記載事項」・「謝辞」・「引用文や言葉」・「写真」・「参考事項」・「序文、まえがき」等は、たとえ1枚でもページ付けを省略しないことをお勧めします。

6. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

(4)「初出一覧・参考文献などは、原本の形式に従って書く」の解釈について教えてください。原本の初出が、最初に書かれているものがありました。この場合には、点訳も原本の位置に従って前にもっていくほうがいいのでしょうか。てびきにある「原本の形式」は、記載する位置も含まれているのでしょうか。

【A】

この場合の「原本の形式」には、記載する位置は含まれません。初出一覧・参考文献、著者紹介などは、原本の位置にかかわらず、点訳書最終巻の巻末に入れるのがよいと思います。

7. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

1冊の本で、表紙カバーに著者紹介、本文末に著者略歴が書かれています。「著者略歴」は箇条書きのような形式ですが詳しく、「著者紹介」は略歴を抜粋したような文章になっています。この場合、表紙カバー情報と巻末にそれぞれ記載したほうがよいのか、両方とも巻末に並列して書いた方がよいのでしょうか。

【A】

基本的には詳しい方を、点訳書最終巻の奥付の前に置くのがよいと思います。ただ、これは一般論ですので、2カ所に掲載されていて、それぞれが補い合うような情報であれば、両方を点訳し、点訳書最終巻の奥付の前に置いてもよいと思います。

8. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

サピエに登録する本を点訳中です。質問は参考文献の書き方についてです。

「てびき4版」p203 5 (4)に「参考文献などは、原本の形式に従って書く。」とあります。

以下の原本の場合、

『驚異の小器官 耳の科学 聞こえる仕組みから、めまい、耳掃除まで』

国立国会図書館を検索すると、副書名は、
聞こえる仕組みから、めまい、耳掃除まで でした。

副書名を棒線でつなぐ等の処理はせずに、
原本通り、『驚異の■小器官■耳の■科学■聞こえる■仕組みから、■めまい、
■耳掃除まで』でよいのでしょうか？

また、4版てびき p198 3 表題紙 処理2に「副書名は棒線との間を一マスあけて書く。」とありますが、これは、表題紙の場合だけで、本文中や参考文献においては、原本通りで処理をして、この処理をつかうのは誤りでしょうか？

【A】

お答えの結論から先に申し上げれば、原本通り、『驚異の■小器官■耳の■科学■
■聞こえる■仕組みから、■めまい、■耳掃除まで』と書いてよいと思います。

また、「てびき」p198【処理2】は、標題紙だけに用いられる書き方ですので、それ以外で、②⑤②⑤の点を用いる場合は、p157 副見出しの書き方を参考に、記号間の優先順位に従って書くことになります。

ご質問の例では、調査の結果、詳細な書誌が分かったわけですが、参考文献に記されているすべての書誌を調査することは困難ですし、国会図書館とTRC（「サピエ」の書誌）とでは判断が異なる場合もあります。参考文献は、その本の判断で、統一した書き方をしておりますので、原本の通りに点訳するのが確実な方法だと思います。

9. p203 6. 奥付

奥付に電話番号を記載するとき、「てびき」の例に、「デンワ」の後ろ、二マスあけの場合と一マスあけの場合があります。電話番号を住所の一部と考えるか、住所と切り離して考えるかによってマスあけが異なるのでしょうか。

「ショメイ」の後ろ、「チョシャメイ」の後ろに小見出し符を用いず、二マスあけで点訳し、「デンワ」の後ろは一マスあけにすることは支障ないでしょうか。

【A】

「てびき」の例の一マスあけと二マスあけの違いは、お考えの通りです。

ご質問のような書き方の場合、「デンワ」の後、一マスあけでも誤りではありません。ただ、小見出し符を用いているときと異なり、発行所の後、住所、電話番号も行を替えて3マス目から書く場合は、「デンワ」の後二マスあけにした方がよいと考えて、「てびき」では二マスあけにしています。

10. p203 6. 奥付

副書名が原本の表紙・奥付に記載されておらず、ブックカバーに書いてあるような場合、奥付は原本にあることのみ書けばよいのでしょうか。あるいはTRCに沿

って記載した方がよいのでしょうか。

【A】

原本奥付で分かる範囲で「書名、副書名」などを決めても間違いではありません。

しかし、「サピエ図書館」にアップする場合は、書誌と点字データで不一致があるよりも、TRCと統一した方が、何かと都合が良いのではないかと思います。必ずどちらとは言えませんが、「サピエ図書館」にアップする本の場合は、「サピエ」の書誌と点訳図書が一致している方をお勧めします。

なお、原本表紙に記載がなくても副書名として採用した場合は、奥付だけでなく、標題紙にも副書名を入れることになります。

11. p203 6. 奥付

現在、洋書をUEBで点訳していますが、奥付に相当する文は、洋書ですので表題紙の次に入っていて、本の最後に奥付はありません。この奥付をどのように処理すればいいのでしょうか。また、標題紙には日本語で製作館名が入りますが、英語部分を外国語引用符で囲むか、日本語の製作館名をカッコで囲むなどの区別が必要でしょうか。

【A】

「サピエ図書館」の製作基準では、標題紙の次に目次を入れ、その巻の最後に奥付を入れることを基準としていますので、標題紙の次には目次を入れてください。そして、巻末には、奥付を入れてください。

巻末の奥付の原本に関するところは、必要部分だけを抜き書きするか、原本奥付の通りに入れるかは、原本の種類や内容にもよるので、それぞれの施設・団体の方針で作成していただいて構いません。また、巻末に必要な事項だけを入れた上で、目次の次に、下がり数字などでページをつけて、原本の奥付をそのまま掲載する方法でもよいと思います。

二つ目のご質問についてですが、標題紙は、和書の標題紙と同じ配置にしますので、書名、副書名、シリーズ名、著者などは、外国語引用符で囲まないで書いて構いません。巻数、全巻数、製作館は日本語で、特に囲み記号は必要ありません。

12. p207 9. 点訳書凡例

1行あけが多い本を点訳したところ、点訳データのページの先頭に1行あけが連続してしまいました。ページが変わるたびに先頭行が空いていたりしますので、触読者にとって大変読みにくいと感じます。このような場合には点訳書凡例で断ることも考えられるのでしょうか。

【A】

確かに、行あけの多い墨字の本が目立つようになり、点訳していても、1行目が

空行になってしまうことも多くなりました。全巻通して読めば、原本の特徴も分かっていたと思いますが、先頭行が空白になることが多く、違和感があるほどであれば、点訳書凡例で断るのもよいかと思います。

点訳書凡例は、点訳書独自の留意点を書くものですし、独立して1ページを使用しますので、読み飛ばすことも、あとから戻って読むことも、読者の判断に委ねられ、他に影響を及ぼすこともありません。ですので、このように原本の特徴によって点訳上読者が違和感を覚えるような場合も、点訳書凡例を活用していいと思います。